
雨の時間に.....

チラリズム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の時間に……

【Nコード】

N0596B

【作者名】

チラリズム

【あらすじ】

雨。それは、すべてを洗い流してくれるようで、全てを曝け出してしまおうで……そして一人の少年が雨を求めた。

月明かりのなか、橋の上で一人の少年が立っていた。

年齢は15くらいだろうか？ 髪の色は金色で短髪、白色の服には赤い血が付いていた。

彼は思う。

どこか遠くへ行けたなら……。でも俺はココにいる、闇が俺を支配する。

少年の表情は暗く、そして疲れていた。

橋の上で座り込み、欄干に背中を凭れ掛ける。

しばらくして月や星達が雲に隠れて雨が降ってきた。

時間が経つにつれて、激しくなる雨で湿った木の匂いが少年の嗅覚から血の匂いを消す。

しばらくして一台の小さな車が橋を渡り、少年の目の前を横切った。車が横切る前までは居なかったはずの少女が、車が横切り終わるとともに少年の目の前に現れた。

灰色のレインコートを着て、髪の色は水色、瞳の色も水色、何より美しい容貌な少女の手には黄色い傘が握りしめられていた。

歳は少年と同じくらいだろう……少女は少年の瞳を見つめながら近付き、少年に傘を渡した。

受け取った少年は礼も言わず、立ちん坊の少女に尋ねた。

「お前は天使か？ それとも悪魔か？」

「いいえ、私は雨」

真顔で答えた少女を鼻で笑う少年。

「フツ……そっか、雨なら無理だな」

「……？」

「雨は翼を持ってないもんな、落ちるだけだもんな……」

「あなたは翼が欲しいの？」

「ああ欲しいね、誇らしい翼で何処か遠くへ飛びたいよ……あんたが墮落の女神だったら良かったのにな」

「……そう、ごめんなさい」

少女は少年の隣にゆっくりと座った、まだ少年は傘を開こうとはしない。

お互い俯きながら話を続けた。

「お前、本当に雨なのか？ 雨ってどーいう意味だよ？」

「言葉のとおり、雨が降れば現れて止めば消える……それが私」

「人にしか見えねえよ」

神様も驚くだろう、彼女は人と変わりはない。

少年は少女の顔に触れようとした、まだ理解のできない少年は少女を人かどうか確かめようとしたのだろう。

しかし途中で恥ずかしくなってやめた。

「……なに？」

「な、なんでもない」

少年は赤面し、少女から目を逸らした。

二人のあいだに沈黙が続く。

何分経ったのかは分からない、ただ少年は居心地が安らいでいた。

まるで何かに優しく包まれている感じ。

「お前、名前あるのか？」

「名前？」

少女は首を傾げた、理解ができなかったようだ。

「わからない……でも、きっと無いと思う」

「……そっか」

少年は鼻の下に手をあて、少しばかり思い詰めてから口を開いた。

「じゃあ嘉夜かよな」

「……え？」

「お前の名前、嘉夜に決めた」

「嘉夜？」

「死んだ俺のおフクロの名前だよ」

少年は寂しそうだった。

雨が降る中で少年の瞳からは涙が出ていたのかもしれない。

嘉夜は少年をソツと抱きしめる、少年は裏声になり叫んだ。

「な、なにするんだよ！」

少年は嘉夜を突き飛ばした。

尻餅を付いた嘉夜は驚いた顔一つせず少年に聞いた。

「あなたの名前は？」

「お、俺！？ 俺は……けんいち賢一」

嘉夜は軽く笑みを浮かべて賢一を再び抱きしめた。

今度は突き飛ばさない賢一。

「なあ嘉夜、天国つてあるのかな？」

「ごめんなさい、わからない」

「おフクロ、天国に逝けたのかな？」

抱きしめていた嘉夜は立ち上がり、賢一に手を差し伸べた。

その手を借りて立ち上がる賢一。

二人は暗い夜道を寄り添いながら歩き始める。

橋から少し離れた場所に公園があった、そこへ二人は向かう。

黙り込んでいた賢一は、ゆっくりと口を開いて嘉夜に全てを語り始めた。

「おフクロの飯、マズかったんだ。一生懸命作ってるのはわかるんだけどマズかった」

賢一は目を細め、頭の中で母親のことだけを考えた。

「ドジでさ、何やらしても不器用でさ、でもいざという時にちゃんと母親らしいところがあってさ………だけど死んだ」

「どーして？」

「……オヤジに殺されたんだ」

賢一はその場に立ち止まり嘉夜を見つめた。

嘉夜は何も言えなかった。

賢一が苦しいのは分かっている、心の中で泣いているのも分かっている、でも何を話しかければ良いのか分からなかった。

「人って簡単に死ぬんだな」

「……私、人間じゃないから」

「ハハッ……そっか悪い」

二人は濡れたベンチに腰掛けた、もう賢一はズブ濡れなのを気にしていない。

嘉夜からもらった傘も気持ちいを落ち着かせるために握る物でしかなかった。

「オヤジが浮気しているしないで揉めてさ、おフクロは首を絞められて殺された……俺、その時に怖くて一步も動けなかったんだ。おフクロ助けられなかった」

嘉夜は徐ろに口を開いて聞いた。

「その血は？」

「オヤジの血……俺、いつの間にか台所にあつた包丁手にしてオヤジの心臓を刺してたんだ。あっけなかった、オヤジ動かなくなっさ、いっぱい血を流してさ」

賢一は俯き、頭を抱えて自分がした愚かさを噛みしめる。

「気づいたら俺、家を出て逃げてた……バカだよな俺」

「そうね、バカね」

「もう、誰のために俺がいるんだろうって思う」

二人だけの時間は続く。

夜中の公園でジョギングをする人がたまにいるけれど、こんなに雨が降ってちゃ走る気にもならないらしい。

公園は二人の貸し切り状態だった。

「最初から最後まで真実がなかったことなんて無いでしょ？」

嘉夜は賢一に言った。

「……え？」

「散ることのない花なんて無いでしょ？」

「意味分かんねえよ」

「悩むことなんてないよ……誰のために自分がいるなんて」

「そうかな？」

「そうだよ、生きていればそれでいいんだよ」

賢一の病んだ心を治そうとする嘉夜は必死だった、だからこそ賢一は全てを受け入れ……そして決めた。

「俺、これから警察に行ってくるよ」

ベンチに座っていた賢一は立ち上がる、それに続いて嘉夜も立ち上がる。

「警察？」

「罪を償う場所さ、俺は逃げない……小さな嘘がいずれバレるように、逃げることもなんてできないんだよな」

父親を殺した賢一は自首を決意した。

「あなたが決めたなら、それがいいと思う」

「もともと俺が誇らしい翼を手に入れられるわけがなかったんだ……母親を守れなかった俺なんかさがさ」

少年の決意とともに朝日が射してきた、雨も小雨になり二人にとって数分の感覚が数時間も立っていた。

もうじき朝になる。

「お別れだね」

嘉夜が呟くように言った。

「また会えるよな」

「ごめんなさい、それは無理なの」

「なんでだよ？」

「言ったでしょ……私は雨だから、雨が止めば消えるのよ」

「また雨が降れば会えるんだろ？」

嘉夜は首を横に振った、そんな中で雨はさらに弱まっていく。

「たとえ雨の時に賢一が私に会っても、それは今の私じゃない……
同じ雨は二つと無いの」

「い、意味分かんねえよ！」

「賢一と一緒に話した私は、今日だけの私……二度と会えない」

「嘘だろ……嫌だよ！」

賢一は嘉夜を抱きしめた、嘉夜の体は冷たくて細い、そして嘉夜は透明になっていく……ゆっくりと。

「俺信じてるからな！自分を信じることをもう一度はじめさせてくれた今の嘉夜と、また会えるのを信じてるからな！」

「私たち雨はね、人と関わりを持つてはならないの、すぐに消えてしまう命だから相手を悲しませてしまっただけ」

嘉夜は弱々しい力で賢一の腰に手を回して抱きしめた、さらに薄くなる嘉夜は賢一にとって触れている感覚すらない。

「でも私、辛い顔した賢一を見て耐えれなかった。賢一とお話してますます離れるのが嫌になった」

短い、本当に短い時間だったが二人にとっては掛け替えのない時間。その時間が終わりを告げる。

残酷なる太陽。

空は光を降らす。

「私も信じてる、また会えることを……」

「……嘉夜」

「そう……私は嘉夜、賢一に名前を付けてくれた特別な雨」

賢一は嘉夜と指切をした。

「これは何？ 賢一？」

「また会えるおまじないだ」

二人は笑みを浮かべ、指切した手を離さない。

しかし、嘉夜は一瞬にして消えた。

雨が完全に止んだ。

賢一の足元に水溜まりができた。

賢一はその水溜まりを手で掬い囁く。

「ちょっとだけ……バイバイな」

賢一は歩きだした。

自分を信じて前に進む、光り輝く空を見つめて……。

（後書き）

読んでくれてありがとうございました。よければ、御感想を下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596b/>

雨の時間に……

2011年1月25日05時42分発行